

## - 最終講義 -

## MY PATIENT IS MY TEACHER

川崎医科大学内科学(循環器)教授 沢 山 俊 民

## 1. プロローグ

私は開学当時から2年間は助教授であったが、昭和51年(第一期生の時期)からこんにちまで教授として学生を指導し続けている。

さて、私の座右の銘は表題にもあるようにMy Patient is My Teacherであることから、この最終講義では「患者から教わったこと」を順次紹介してその責を果たしたい。

## 2. 「心臓」との出会い

私が恩師の一人に遭遇したのは母校である京都府立医大卒業直後のインターン時代であった。それは米国留学の経験が深い高木誠先生で、大学では教わらなかった「臨床心臓病」との出会いであった。先生から指摘されたが私には聴こえなかった心音(陳旧性心筋梗塞患者に発生していたギャロップリズム)が次項で述べる研究テーマの発端となった。

なぜ私が心音に興味を持ったのか。それは案外、少年時代には音楽鑑賞に、大学時代にはヴァイオリン演奏に、それぞれ熱中した結果なのか。なにしろヴァイオリンを始めて3年目の6年生時には学生オーケストラのコンサートマスターに選ばれたくらいだから。所詮、心音は楽音ではなく、あくまでも雑音・ノイズなのだが。最近の学生いわく「先生は音楽で耳が鍛えられているから、心音がうまく聴こえるのでしょう」<耳ではなく、もっと中枢部の鍛練の賜物だと言っている>。

## 3. 母校・日本に飽き足らず、国内外に留学の時代

心臓病の臨床に興味尽きなかった頃、当時は主流でなかったこの分野(むかし消化器、いま循環器)のこと、大学内のどこにも師はいなかった。思い切って教授を通じて東京大学医学部第二内科-上田英雄教授-にお願いをしてしまった。それが叶って昭和35年に上京した。当時は現在とは異なって、心臓病といえばリウマチ熱の後遺症に悩む弁膜症患者や先天性心奇形症例が主で、それらの数と種類が実に豊富であった。上田教授からは、研究の場としては心音図室が、研究のテーマとしてはギャロップリズムが私に与えられた。その結果、現在なら人工透析で延命される筈の慢性腎不全例は、3音ギャロップが聴かれはじめると生命予後は平均3週間であるという成績が得られた。このデータはのちに大学院研究課程の学位論文の基盤となった<sup>1)</sup>。

さらに渡米したい一心で先ず応募したのが各部署の所属長がすべて米国エール大学の教職員で占められていた広島市のABCC(原爆障害調査研究所、現放射能影響研究所)であった。都合2年間のお務め中に念願が叶った。そのエール大学医学部心臓内科学留学中(昭和42年から45年の3年間)には、帰国後、成書「心臓病診断の技術」を執筆するもとなったデータが豊富に得られた。37歳の若輩が著書を出版したことで「出る釘は打たれる」場面も多かった。当時は(今も変わらないが)心音図に加えて心尖拍







血栓溶解療法が行われてしまったのである<sup>14)</sup>。

診断機器に関して言えば、超音波法や脳ドック、治療手段に関しては、安易に行われがちな人工ペースメーカーの埋め込みや血栓溶解療法が要注意手法として挙げられる。

振り返って、阪神大震災の現場を例に取れば、あの状況下では心電計やレントゲン機器すら役に立たなかった。問診と診察というコモントクニックのみが頼りであった。私はこれを「素手の医療」と呼びたい。これからの医療の中心をなす高齢者医療、在宅医療でもこのことが当てはまる。

#### (2)誤診を避けるために

誤診を避けるためには、ハイテク機器のみに頼ることなく、まず問診と「五感診療」に加えて心電図と胸部レントゲン写真という4大コモントクニックのみで診断の方向が決まることを知るべきである。その参考になるメディアとして、自作の資料を挙げておこう<sup>9)~11)</sup>。

### 9. 現代医療と伝統医療の統合型の「21世紀型医療」を目指して

#### (1)米国医療界の現況を覗く

昨今、米国や本邦での医療界の動きが、21世紀には現代医療と伝統医療の統合型医療の必要性を示唆している。米国では、昨年、NIHが伝統医療の研究に莫大な予算を供出した。同時期に、著名な医科大学には伝統医療を学ぶ講座が開設された。さらに、伝統医療に関心を持たない開業医からは患者が離れる傾向が出ている。

#### (2)本邦医療界の動きはどうか

本年度の「内科学会総会」を振り返ってみると、そのメインテーマは「価値ある人生のための医学と医療」であり、本会の特別講演の演者として、初めて柳田邦男氏が選ばれた。氏のテーマは「いのちの質が問われる時代」で、聴衆に多大な感動を与えた。

なお、総会会頭（二保九州大学内科学教授）は「21世紀の医療は先端医療と全人医療に関わる医師が1対1の割合であるべきだ」と発言した。

(3)21世紀の医療はどう変わるべきか、変えるべきか。

私は、「治さない医療」「教えない教育」が望ましいと思う。「治さない医療」とは、他人任せの医療ではなく、自己の自然治癒力を高める医療で、「教えない教育」とは、偏差値を重んじる教育ではなく、自己の関心事を啓発する教育である。

### 10. 川崎医科大学を去るにあたって

私は、退官後は新たに、現代医療と伝統医療をドッキングさせたクリニックを開設し、新時代の医療を目指す所存である。クリニックは平成11年5月6日オープンで、そこでは従来の循環器内科診療（ハート・クリニック）を行うかたわら、現代医療と自然医療をドッキングさせることで、英国で実現しているドクターズ・ヒーラーズ・ネットワークを地でゆくような運営もできるようにしたい。

### 11. エピローグー患者から学んだこと

40年の医師としての生活の中で、私が患者から学んだことは、大別すると二つの事柄に集約される。

一つは「現代人は、意外にたやすく急死する、意外にたやすく心筋梗塞や肺塞栓を起こす」こと、二つは「現代人は、意外にたやすく誤診されている」ことである。

前者には「血栓」が関連しているので、これに対する予防策が講じられる必要がある。一方、後者には、医療人の知識と経験不足に加えて、相手とのコミュニケーション不足も関連している。従って、21世紀の医療は、現代医学に代表されるような平均的医療のみではなく、個人に最適の医療がなされるべきであり、この点でも大いに「患者に学ぶ」必要がある。

以上、私の最終講義の内容が、より良い教育・医療・研究の方向づけになれば幸いである。

## 文 献

- 1) 沢山俊民：奔馬調律の臨床的並びに心音図学的研究（第1報）. 最新医学 18：1795-1900, 1963
- 2) 沢山俊民, 川井信義, 宮高宜夫：最近の僧帽弁狭窄症. 診療像の変貌と診断上の問題点について. 呼吸と循環 29：411-420, 1981
- 3) 沢山俊民, 寒川昌信, 長谷川浩一：最近の僧帽弁狭窄500例における加齢, 心房細動, 塞栓の関連について. 日内会誌 72：401-415, 1983
- 4) 加藤武彦, 沢山俊民, 鼠尾祥三：心房細動と脳塞栓症との関連-最近20年間の入院患者965例での検討. Jpn Circ J 59：342, 1995
- 5) 沢山俊民：心房細動のマネジメント-血栓塞栓症の現況と問題点. 治療 80：189-198, 1998
- 6) 長谷川浩一, 沢山俊民：急性肺塞栓の早期診断と治療対策. 多施設225例の臨床的解析. 呼吸と循環 41：773-781, 1993
- 7) 川井信義, 沢山俊民：入院精査後加療中の心臓性急死における急死予知はどの程度可能か. 心臓 22：97-101, 1990
- 8) 沢山俊民：心臓突然死の研究. 誘因としての「労作」に関する基礎疾患・臨床事項の差について. 心臓 24：94-98, 1992
- 9) 沢山俊民：CDによる聴診トレーニング. 東京, 中外医学社, 1995
- 10) 沢山俊民：日経ビデオ. 循環器疾患の基本聴診法. 東京, 日経メディカル社, 1995
- 11) 沢山俊民：日経ビデオ. 循環器の診かた・外来心臓病学入門. 東京, 日経メディカル社, 1995
- 12) 沢山俊民, 鼠尾祥三：気付きにくい急性心筋梗塞（I）多彩な発病時の患者の反応. 治療 74：948-954, 1992
- 13) 沢山俊民：コモンテクニックに精通しよう：循環器疾患の落とし穴-誤診を避けるために. 特集/よりよい外来診療のノウハウ. Cardiologist 3：507-510, 1998
- 14) 井上省三, 沢山俊民：急性心筋梗塞として血栓溶解療法後に搬送されたクモ膜下出血の一例. 臨床と研究 73：121-126, 1996



略 歴



昭和9年3月12日 神戸市に生まれる  
 昭和34年 京都府立医科大学 卒業  
 昭和37年 東京大学医学部第二内科（上田英雄教授）  
 昭和39年 京都府立医科大学 大学院 終了  
 昭和〃年 京都府立医科大学 臨床検査部講師  
 昭和42年～ 米国 Yale 大学医学部心臓内科  
 昭和45年  
 昭和45年 川崎医科大学勤務（内科講師・循環器内科医長）  
 昭和50年 同助教授を経て現職（上記）  
 平成11年3月 定年退職  
 川崎医科大学名誉教授  
 平成11年5月 「さわやまクリニック」開業  
 現在に至る

○学会役員

Fellow, American College of Cardiology  
 Fellow, International College of Angiology  
 日本臨床生理学会 - 監事, 年次会長  
 臨床心臓病教育研究会 - 副会長  
 日本循環器学会, 日本心臓病学会, 日本脈管学会, 日本心電学会など - 評議員  
 Director, Doctors Healers Network Japan  
 日本厚生協会 - 会長, など

○業 績

原著・総説 - 650編  
 著書（主著書のみ） - 35編  
 「循環器病マニュアル」「トランプで学ぶ心電図」「CDによる聴診トレーニング」  
 「ビデオで学ぶ循環器病・診察方法・心電図」「心電図診断のポイント」など